

ウォルター・R・ランバスと韓国

—一九〇七年を中心に—

木下 隆男

一 はじめに

初代関西学院院長であったウォルター・R・ランバス (Walker R. Lambuth) と韓国との関係は、彼が両親とともに中国に赴任していた間に、韓国から上海に亡命していた尹致昊^{ユン・チホ}を知るようになった時に始まる。

一八八四年十二月、韓国で起こった開化派のクーデタ・甲申政変に加担したとの嫌疑を受けた尹致昊は、翌八五年一月末、米国南部メソヂスト教会が上海で経営するミッション・スクール中西書院に亡命留学した。ここで彼は院長Y・J・アレンやボネル、レーエ等の教師とともにウォルターの両親ウィリアム・J・ランバス夫妻を知ることになる。

一八八八年十一月、ボネル、アレン両教師の仲介により、アメリカ・ジョージア州にあるヴァンダービルト大学に留学することになった尹致昊は、当時、アメリカに帰国中だったウォルター・R・ランバスと親しく接するようになった。ランバス（以下、特に断らないかぎり、ウォルター・R・ランバスを指す）はこの尹致昊との交際を通じて、韓国におけるキリスト教の布教事情を具体的に知るようになった。日清戦争により日本が清国に勝利した結果、韓国に親日的な政権が樹立された一八九五年以降、彼の韓国布教に対する関心は本格化する。

韓国側の史料によれば、ランバスは一九〇七年に二度、一八九九年、一九一九年、一九二〇年、一九二一年にそれぞれ一度ずつ、計六回にわたって韓国を訪問している。

一九〇七年の二度のうちの一度と一九二一年以外はすべて南監理教会朝鮮年会に出席するためである。本稿においては一九〇七年におけるランバスと韓国の関係について、ランバスが残した一九〇七年の記録を中心に述べる。

二 先行する研究

六回にわたるランバスの韓国訪問に関しては、過去、次の二つの資料が関西学院から出されている。

- ①ウォルター・R・ランバス著『日本雑記』（半田一吉訳）、関西学院キリスト教教育史資料Ⅲ『ウォルター・ラッセル・ランバス資料』関西学院キリスト教主義教育研究室、一九八〇年。

- ②ウォルター・R・ランバス著『朝鮮雑記』（宮田満雄訳）、関西学院キリスト教教育史資料Ⅴ『ウォルター・ラッセル・ランバス資料（2）』関西学院キリスト教主義教育研究室、一九八四年。

①②ともに一九〇七年四月に来日したランバスが、半年あまり日本に滞在し、その間、二度にわたって韓国を訪れながら、日韓両国の関係を記録したものである。なお、②に関しては記者である宮田氏が、関西学院キリスト教主義

教育研究室年報「キリスト教主義教育」十一号（一九八三年九月）に、「ランバス資料邦訳について―朝鮮関係資料について―」という解説を書かれている。

三 世界キリスト教学生連盟大会

一九〇七年四月に第七回世界キリスト教学生連盟総会が東京で開かれ、五月に同じく東京で、日本メソヂスト三派の合同総会が開催された。さらに六月には韓国で第十一回南監理教会朝鮮宣教年会が開催された。

第七回世界キリスト教学生連盟大会は四月三日から七日にかけて東京神田猿楽町の基督教青年会館で開催されたが、ランバスはほとんどこの大会の開催に合わせるように来日した。

（前略）この前の記事で、私達がこの国に来て最初の数日間、首都で開かれていたキリスト教学生連盟会議のことについて私は述べた。会議参加者は二十五カ国から来ていて、その数は六百二十七人に及んだ。このうち多数の者が家庭でもてなされ、他の者は市民の負担でホテルに泊められた。東京市も気前よく寄付を出して接待

に資すると共に、会議のあとに続いて二週間、この国の主要都市の学生の間で行われる福音宣教運動にも貢献した。この一回の会議の間に（中略）総額五千三百円が寄付され、（中略）全部で一万円以上になった。このたくさんの額に加えて、伊藤侯爵が単独で一万円の寄付をし、接待の費用と、東京市その他の都市で、学生のために既に発足している仕事のために当てられることになった。⁽¹⁾

一九〇五年十一月、韓国に特派大使として派遣された伊藤博文は第二次日韓協約を成立させ韓国を日本の保護国としたあと、翌月、統監に就任する。その伊藤は世界キリスト教学生大会に際して単独で一万円もの寄付をしたのみならず、この会議の議長団のひとりであった本多庸一宛に祝電を送っている。それは、この会議が「東西の交流の歴史における新時代の到来を告げるものであります」と歓迎の意を述べたものであるが、この祝電に関してランバスは次のようなコメントを記している。以下、本編中の「」は筆者の注である。

（前略）本田博士宛に発送されたこの電報は、多額の贈

り物を伴ったことでもあり、非常に重要である。これには「日露」戦争終結時に同様の贈り物が天皇からYMCAに贈られた先例があり、このことはこの国と隣接する大陸で、多数の人達にとって新時代が始まったという確信を筆者に与えた。この人達（日本人）は信仰を告白したクリスチャンではないにしても、徳性の価値とキリスト教文明の力と影響を認めていることは疑いない。⁽²⁾

伊藤の言う「東西の交流の歴史における新時代の到来」、ランバスの言う「大陸で、多数の人達にとって新時代が始まったという確信」というのは日露戦争における日本の勝利により満州と韓国が日本の勢力下に入り近代文明の恩恵に浴する新しい時代に入ったことを意味する。しかし、両者の言う近代文明には食い違いがあり、日露戦争終結時における明治天皇の御下賜品や伊藤のYMCAに対する祝辞は、この食い違いを埋めることが目的であったように思われる。

日本の指導者たちによるこの努力は、さらに世界キリスト教学生連盟会議が終わった翌日四月八日に、東京飯田橋にある小石川後楽園で行われた園遊会においても見るこ

ができる。

世界キリスト者学生連盟会議の議員を招待して後藤新平男爵夫妻によって開かれた園遊会の時ほど、日本人の手厚いもてなしが美しくしめされたことはなかった。主人役の男爵夫妻は、市内の北部にある、かつて有力な殿様だった水戸公の本邸のあった後樂園で、午前十時から午後四時まで接待に当たった。⁽³⁾

会議の参加者六百二十七人のうち四百名近くがこの園遊会に招待された。昼食を兼ねた軽食の席のことと思われる。後藤は招待した四百名ほどの代表者を前に、歓迎の挨拶をした。全文二千字近い堂々たる挨拶で、前以って全文を印刷したものに記念品として美しいデザインが施された銀の小箱まで添えて、招待客全員に配布した。感激したランバスは、これだけの準備をするにはきつとクリスマスチャンである後藤の妻が何日も熱心に考えたにちがいがなく、その費用は少なくとも数千ドルはかかっただろうと言っている。ランバスはこの後藤の演説を全文記録している。その中から、後藤がこのような盛大な園遊会を催した意図がどこにあったかが窺われると思う部分を引用する。

(前略) 南満州鉄道総裁として私が個人的にも公的にも関係しております満州は、急速に東西の相会う場となりつつあります。御来賓の皆さん、私の真摯なる努力は満州を争いの場ではなくて親交の場とすることに向けられていることをここにはつきりと申し上げたい。ごく最近まで敵意の場であった所も、正しい統治のもとに諸国民が仲よく働くべき場とならねばなりません。⁽⁴⁾

韓国統監伊藤博文と満鉄総裁後藤新平が二人そろって学生大会を歓迎した。当時の為替レートは一ドル＝二円だったから、両者合わせて一万ドルちかく出費をして学生会議の代表者たちをもてなしたことになる。だが、この両者によるキリスト教大歓迎の姿勢は、日本国民の総意からはほど遠いことがやがて明らかになる。

四 韓国の松都^{ソンド}を訪問する

ランバス自身の記録には、四月八日の園遊会以後における彼の行動は具体的に記されていない。しかし、幸いなことに『尹致昊書簡集』にこの直後におけるランバスの行動が記録されている。次に引用するのは朝鮮松都へ現、北

朝鮮の開城市)の尹致昊が、エモリー大学留学中の恩師であったウォレン・A・キャンドラー宛に一九〇七年四月十六日付で送ったものである。

親愛なる監督

私は、朝鮮を代表して国際YMCAの総会に出席するため上海および東京に行つて帰つてきたばかりです。日本に滞在中、朝鮮へ渡る途中のリード医師、および極東宣教部を訪問中のランバス博士にお会いする榮譽を得ました。今月十一日に私はソウルに戻ってきましたが、ランバス博士は翌日の夜、ソウルに到着しました。十三日、ランバス博士、ウェスト氏、およびステイリー博士(医学博士)が松都を訪れました。日曜日を当地で過ごし、昨日十四日にソウルに向けて発ちました。⁽⁵⁾

「国際YMCAの総会」は世界キリスト教学生連盟総会を、「極東宣教部」は南メソヂスト日本宣教部のことを意味している。尹致昊がソウルに戻ってきたのは十一日のいつ頃か定かでない。しかし、ランバスは別のところで、同じこの年にソウルに行った時、三日かかったと言っているから、遅くとも四月九日の午前には東京を出発していたは

ずである。一方、ランバスは尹致昊がソウルに帰ってきた翌日の夜、到着したと言っているから、彼が東京を発つたのは遅くとも四月十日の午前あたりでなかったかと思われる。

到着の翌日十三日(日曜日)、ウェスト、ステイリーとともに松都を訪れたランバスは松都で一泊し、翌十四日(月曜日)にソウルに発つたことになる。一泊二日の松都滞在の間にランバスが取った行動について、書簡は次のように続ける。

そういうわけでランバス博士の松都訪問は非常に短期間でしたが、博士は当地でのあらゆる事業にとっても満足してくれました。日曜日の朝、博士は超満員の会衆に説教してくれました。そして例の如く、「通訳」の欠点にもかかわらず博士の崇高なメッセージは聞く者にとって大きな祝福となりました。博士は当地の宣教部の敷地を拡大するために私たちが決定した買収に賛成してくれました。というより、買収には大賛成で、地価が安く買収しやすいうちに私たちがもつと多くの土地を買収することさえ支持してくれました。博士は東洋において幅広く宣教活動をされたこと、宣教本部の

総務を勤められたこと等の経験から、将来事業を拡大するためには地価が安いうちに取得しておくことが至上命令であり、疑う余地のない賢明な策であることが確信されていたようです。博士は、出発点においてほんのわずかな出費を惜しんだことが後になって教会に莫大な額の財政負担を強いることになった実例をいくつか私に教えてくれました。あなたと博士の支援により私たちが今後そのような過ちを決して犯さずとも済むようになることを私は望みます。

親愛なる博士、これまで私が長い間願ひながら叶えられなかった夢のひとつは、この国にキリスト教徒による模範的なセツルメンツを作ることです。これを実現するためには次のものがが必要です。

(一) 宣教センター、(二) 設備の整った教育機関、(三) 整備された道路等を持ち、少なくとも百戸以上の家を収容できるだけの広大な土地、(四) 以上の条件を備えたセツルメンツの建設計画を実現の緒につかせるために必要な資金。

もちろん、私たちは現在のところこのような計画を実現するための手段を持ってはおりません。しかし我々の学校が実用性という堅実な基礎の上に確立されるな

らば我々の宣教運動の周りにはたちまちにしてひとつの新しい村が成長するはずで、我々の宣教活動が無計画に拡大するのを防ぐためには、条里整然たる計画的な区画が可能なままとまった土地を獲得する必要があります。これらの区画された土地は適切な条件で望ましい団体に貸し出してもよいでしょうし、売却してもよいでしょう。そうすることにより、模範的なセツルメンツの中核を形成することができるようでしょう。ランバス博士は当地の長老師たちに「私の記憶にまちがいなければ一七千円の限度を超えない範囲でさらに多くの土地を買収するようにと言いました。我々がさらにその程度の額の土地を買収しおえた時には改めてあなたに連絡いたします。すでに周囲の地主や家主たちは当初よりも高い金額を要求しつつあります。ランバス博士が松都を発つ直前になって松都の人々―実は、そのほんの一部の人々―が栗林に隣接する時価八百円相当の立派な水田を我が校に寄付してくれました。これらの人々によって支えられている私立学校がこの町には十校もあること、これらの人々は決して豊かな人々ではないこと、彼らはキリスト教徒ではないこと、およびこの学校はキリスト教の施設であることを公言し

ていること―これらの事実を考慮するとき、この寄付は我々にきわめて大きな勇気を与えるものです。⁽⁶⁾

ソウルに次いで松都を朝鮮における南メソヂスト教会宣教運動の拠点にしようという話である。かつてランバスが原田の森に広大な土地を取得して関西学院の礎とした時のことが連想される。

引用文中、「我々の学校」とあるのは、一九〇六年、尹致昊が初代校長となつて松都に設立した韓英書院という南メソヂストのミッション・スクールのことである。この学院には、中日露といった外国勢力から独立した、朝鮮民族の自立した共同体のモデルを作ろうという尹致昊の壮大な夢が託されていた。この夢はアメリカ留学時にすでに構想されていたものであるが、祖国の保護国化という悲劇に直面した彼が、政治の第一線から後退して、宗教・教育という生活の根本に腰を据えて取り組んだ民族再興計画であった。

五 朝鮮、好機到来

四月十四日にソウルに向けて松都を発ったあとのランバ

スの足跡を知る記録は見つかっていない。しかし、ランバスが朝鮮年会に出席したのは六月二十日からである。その間、五月二十二日から六月七日まで東京の青山学院で開かれたメソヂスト三派合同総会に出席しているから、遅くともそれ以前に一度、日本に戻っているはずである。となると、今回の韓国訪問はいったい何のためだったのかという疑問が湧いてくる。四月の世界学生大会の場で尹致昊と会ったときに両者の間に何らかの話があったことが考えられるが、詳しいことは分からない。わずかに手がかりを与えてくれるのは『朝鮮雑記』中の第八章「朝鮮、好機到来」と題された文章である。ランバスはこの章の中ほどに次のように書いている。

キャンドラー監督 (Bishop Candler) は、これらの人々の間に生まれてきている機会と素晴らしい成功に関して、次のように記している。「人々は、私がこれまで見たことがないような形でキリストのもとへ集まっている。実に過去三年間、朝鮮における教会はリバイバルの状態にあると言えるであろう。そしてこのリバイバル運動は、年毎に勢いを得ており、ますますその強さを増しつつある。伝道事業は、早急に宣教師の数を増

やすことにより強化されなければならないし、現地人聖職者養成の対策が直ちに立てられなければならない」。当地の監督は、各教会に対してこの緊急な訴えに応ずるため、その基調方針を打ち出している。バージニア州、ピーターズバーグのメソヂスト達は、この要請に応ずべく立ち上がっている。将来の朝鮮にとって重要な意味を持つこの養成所を発足させるために、通常の分担金に加えて必要な一万ドルが二年以内に集められると考えられる。非キリスト教徒である行政官がキリスト教徒を学校の理事に任命し、非キリスト教徒の子供達が、我々の学校に通学したくてキリスト教徒になることを両親に嘆願するというこの国において、今こそ我々が、この時代の緊急な要請に応える教育施設を供給すべき時である。(七行中略) この緊急事態が我々の関心を引かないで、我々はこれを見過ごそうと言うのであるか。あと一步踏み出せば、朝鮮がキリスト教化される最初の異教国家となるという時に、我々は手を貸さないでいるというのだろうか。

一九〇六年九月、第十回朝鮮年会を司会するために訪韓したキャンドラーは松都を韓国における南メソヂスト教会

の一大拠点とする計画を立て、その中心に韓英書院を据えることに決定し、既にその第一歩を踏み出した。ランバスはこれを更に一步押し進めて、朝鮮という異教国家をキリスト教国家にするという、壮大な夢を描いていたようである。学生連盟大会の直後に、尹致昊の後を追うように訪韓し、日曜日の松都の教会で超満員の会衆に説教したというランバスの姿は、「あと一步踏み出せば」という彼の期待の表れのように思われる。

六 救世軍ブース大将の来日

さて、四月十二日からわずか数日の間に飛ぶようにして朝鮮の松都を訪問したあとのランバスの足取りが分かるも一つの資料は『日本雑記』第三章「日本の攻略」と題するほぼ六頁にわたる文章である。

救世軍の創立者であり指導者であるブース大将 (General Booth) が日本に来ていて、国内を成功裏に歴訪した。大将とその随行者は多くの中心都市を文字通り包囲攻撃し、至るところで人々が示した示威行動のみならず、礼拝に出席した群衆の数から見ても、彼ら

はこの国を占領してしまうかと思えるほどである。大將は商船ミネソタ号で太平洋を横断して、四月十五日に横浜に着いた。⁽⁸⁾

「日本に来ていて」という表現からすれば、ランバスが朝鮮から日本に戻ってきた時には既に大將は来日していたという意味に取れるから、ランバスが日本に戻ってきたのは四月十六日以降である。これは一九〇七年当時、朝鮮から日本への移動日数が三日かかったというランバスの言葉を考慮するとき、ランバスが十四日にソウルに向けて松都を発ったという尹致昊の書簡と合致する。

訪日中のブースについての記述中、実際にランバスがブースの演説会を聞いて書いた記事と、ブースに関する新聞記事を読んだのものが混じっていて、厳密に両者を区別することは困難である。ただ次の部分だけはその描写がきわめて具体的であることから、実際に演説会を聞いたように思われる。

ブース大將の訪問中に起こった最も興味深い出来事の一つは、東京市長〈尾崎行雄〉令嬢の小さいハル子嬢から大將が花束を贈呈されたことである。このかわい

い小さな子供が、雪のような白髪をして優美なひげをたくわえた七十八歳のこの尊敬すべき人の顔を下から見上げ、純粹さと、日本人が立派な生涯を高く評価することを表す賛辞の印たる花を差し出しているこの光景は、注目すべき光景だった。花を受けると大將は感謝の言葉を返し、最高位の高官に対するよりもっと低く頭を下げてその気持ちを表し、軍隊を理解するにはそれを統率する将軍を理解することが必要だと言った。⁽⁹⁾

これは恐らく四月二十二日に神田三崎町の東京座で行われたブースの演説会だったと思われる。田中正造の著述にこの日、ブースの演説を聞きに東京座に行ったことが記されている。

ブースの日本訪問は世界学生会議とは関係なく、独自に世界演説旅行をしたものである。ブースの接待には当時の東京市長だった尾崎行雄が、学生会議で後藤新平が果たしたのと同じような態度で当った。学生会議に対する伊藤や後藤の扱いぶり、そしてブースに対しては尾崎東京市長のみならず、その娘まで駆り出され、ついには明治天皇まで破格の謁見を許されたというのは、キリスト教に対する政府首脳の特別の配慮が働いていることを窺わせる。この章

の最後でランバスは、ブース一行が五月二十四日に横浜からミネソタ号でシアトルに向けて出航する予定であると書いている。日本におけるメソヂスト三派の合同会議が開催されたのは、このブースの出航二日前の五月二十二日のことであった。ランバスはこの会議について特に触れていない。

七 第十一回朝鮮年会

救世軍のブース大將が横浜からアメリカに向けて発つたと言われる五月二十四日からさらに一カ月後、韓国ソウルにおいて朝鮮南監理教会の第十一年会が開かれた。『朝鮮南監理教会三十年紀念報』一九〇七年の項には次のようにある。

(一九〇三年に始まったキリスト教大復興運動はその絶頂に達し、朝鮮全国を震撼させた)

(五月、日本東京でメソヂスト三派が合同し、日本メソヂスト教会を組織、日本人監督が選出された)

六月二十〇二十五日、培花学校で開催された第十一年宣教年会はウィルソン監督が司会したが、その時、監督夫

人と宣教部総務のランバス博士(後、監督となる)とアリス・コップ女史も監督とともに参加する。年会において、朝鮮人教役者を養成するために北監理教会と合同で神学校を設立することが可決された。これが即ち、現在ソウルにある監理教会協成神学校の始まりである。

(七月十九日、光武皇帝が皇太子に譲位された)

元山に上里礼拝堂が設立されたが、その費用の大部分は朝鮮人教友の寄付金で賄われた。⁽¹⁰⁾

一年毎のデータがないので詳しいことは分からないが、一九〇〇年における朝鮮のキリスト教人口は新、旧教合わせて六〇、五二二人であったが、一九一〇年には二四〇、八六九人となっている。⁽¹¹⁾ 十年間に実に四倍という驚異的な増加率である。ランバスが朝鮮をして世界最初の異教国家からキリスト教国家へ再生した国にする「好機到来」と考えたのも無理はない。ランバスは引用文中にある、教役者養成のための神学校の他に、尹致昊との個人的な話し合いを通じて、尹が松都に計画している「キリスト教徒による模範的なセツルメント」、彼が朝鮮民族の未来を託して「キリスト教徒による理想の村」と呼んでいる計画を全面的に支持することを約束したように思われる。次の引

用は、この年会が終わって一カ月ほど経った七月二十八日付で、尹致昊がアメリカのキャンドラー宛に送った書簡からである。

(前略) 年会が開かれている間、ウイルソン監督とランバス博士は朝鮮に滞在しておりました。私のアメリカ行きに関してジレット氏が監督および博士と会って話しあいました。私個人としては特にアメリカ行きを希望するものではありませんが、多大の出費と労力をかけてまで私がアメリカに行くことにそれだけの意味があると監督およびランバス博士が考えられるなら、私は行ってもよいと思います。とりわけランバス博士は、私のアメリカ行きは必ずよい結果をもたらさるうこと、もし私が行けば我々のセツルメンツ計画は承認されるだろうこと、こちらの学校が軌道に乗る前に渡米してブッカー・ワシントンの事跡その他類似の施設を訪ねれば有益なヒントが得られるだろうことを確信しているように思われました。それで私はこの勧めを受け入れ、九月八日、神戸より蒸気船シベリア丸に乗って出発しようと思えます。妻もいっしょに連れて行く予定です。⁽¹²⁾

引用文中のジレット (P.L. Gillette) は一九〇一年に來韓し、一九〇三年のソウルYMCAの創立にもなって総務になった人物である。この九月八日のアメリカ行きは、尹致昊自身があまり乗り気ではなかった上に、キャンドラーもランバスほど強くは勧めなかった模様で、結局、実現せず、延び延びになって一九一〇年に漸く実現することになる。尹致昊が乗り気でなかった最大の理由は朝鮮年会が終わへり、そしてランバスが日本に戻ったあとに、のんびり祖国を留守にすることができないような大事件が起こったからである。引用した部分から四行先には更に次のようにある。

きつと今頃は、日本が韓国で行ったことについての情報をあなたは既に新聞を通じてご存知のことと思えます。今月十九日、かつての皇帝が退位を余儀なくされました。明らかに裏切り者の朝鮮人の協力を得て日本が指示して組閣したと思われる韓国内閣が新しい条約に調印しました。その結果、韓国全土は冷酷な日本人の、ありがたい慈悲に實質上委ねられることになりました。いま韓国全土は怒りに煮えくり返っています。しかしウエノム(日本人に対する蔑称)は圧倒的

な力により抑え込みにかかりました。あらゆる者が発言を封じられています。発言を封じることができない者は投獄するか賄賂で買収です。⁽¹³⁾

アメリカにいるキャンドライと異なり、日本に戻ったのちも引き続き滞在していたランバスは「日本が朝鮮で行ったこと」について連日のように新聞を通じて詳細な情報を得ていた。

八 ハーグ密使事件

一九〇五年十一月十七日、第二次日韓協約が締結された結果、韓国の外交に関する一切の事項は新たに日本政府から派遣される統監（その初代が伊藤博文である）によって管理されることになった。外交権を一切失ったということは国民国家の命である主権を失ったことを意味する。これに対して皇帝高宗は、一八八三年に締結された米韓条約の第一条を根拠にアメリカの助力を得るため数度にわたって密使を派遣して抵抗した。だが結局、アメリカはこれを黙殺した。

これらアメリカへの密使派遣の失敗にも諦めることなく、

高宗はさらに一九〇七年六月からオランダのハーグで開催されることになっていた第二回万国平和会議に三人の密使を派遣して韓国の現状を世界各国の代表者に訴えるという挙に出た。この密使がハーグに到着したのが、韓国で南監理教会の第十一年年会が開かれていた六月二十四日と言われている。しかし、この密使派遣も、結局、失敗に終わる。失敗はしたものの、この事件を通じて、欧米キリスト教諸国に韓国側の不満が世界的に知れわたったため、統監の伊藤は激怒した。彼としては自分の監督下にありながら、このような世界的な不祥事を起こしてしまったことに対して、天皇に対して、また本国の閣僚たちに対しても顔向けができない、断固たる処分を打ち出さなければ立場がなくなる考えたのだろう。ついに、高宗を退位させてその異母弟であった皇太子を新帝（純宗）として即位させることにした。

日本と朝鮮に滞在しながらこれら一連の動きを観察していたランバスは、『朝鮮雜記』第五章「朝鮮情勢」において次のように言う。

朝鮮には、「疣を切り取って、腫瘍をつくる」という諺がある。これは西洋の、「フライパンから飛び出して火に落ちる」と言うのと同じものである。この言葉は、

前皇帝〔高宗〕と、ハーグ事件〔一九〇七年〕における彼の関係についての状況を要約していると言えよう。彼が、溺れる者が藁をもつかむ気持ちで密使を送ったということは当然なことである。ところがこの場合、その藁はつかんでみれば機雷であるということがわかり、その爆発は、東洋全体を揺り動かすこととなった。その結果、彼は退位せざるを得なくなり、ソウルにおける騒乱、地方における暴動、朝鮮軍の反乱などを惹起し、数百人の人間が殺傷され、結局は、朝鮮の首都及び全土に日本の支配を招くに至った。敵に反抗して三千人程の朝鮮人が集結したと言われる東海岸の江陵と、最北部の龍州における騒乱を除き、全土は平定されつつある。龍州周辺部には拠点があり、そこには朝鮮の山岳砦が多くあり、かなりの数の朝鮮軍兵士たちが、千二百挺の武器と四万発の弾薬をもってたてこもっていると報告されている。朝鮮北部の出身者は、より強健で戦闘的であるので、山岳地帯にたてこもれば、撃退するまでにはかなり日本軍を手古摺らすことであろう。⁽¹⁴⁾

文中、「」の部分は宮田氏の注である。引用文の後半は、宮田氏が「ランバス資料邦訳について」の（注7）で

言及している反日義兵闘争に関するものである。反日義兵闘争はすでに日露戦争当時から発生していたが、一九〇五年、第二次日韓協約により朝鮮が日本の保護国となつてから、主として両班儒生を中心に地方における日本の分遣隊を襲撃するというようなことが起こっていた。しかしハーグ密使事件のあと、日本国内において対韓強硬世論が強まり、皇帝の退位―新帝の即位を強制的に実現させた他に、第三次日韓協約を締結することにより外交権に続いて内政権まで統監府が掌握、さらには韓国軍隊まで解散させられるという事態に至るに及び、反日義兵闘争は拡大し、キリスト教への改宗者が急速に増えるようになる。この『朝鮮雑記』第五章は八月二十七日に行われる新帝純宗の即位式のことを未来形で述べていること、八月十三日前後と思われる伊藤博文の一時帰国が過去形で書かれていること等から判断して、八月十五日前後から二十七日までの間に書かれたものと推定できる。

さてランバスは次の第六章において、四月の来日以来八月末に至るまでに韓国と日本で起こった政治的大激変について次のように結論している。因みにこの第六章は八月三十日まで書かれたものと推定できる。

公正な判断をすれば、国王自身とその国家を破滅に導くに至った政治的譲歩を、前国王に強要するような政策を支持することはできない。このことを日本は確かにやっていた。国王が自らの手で条約に署名し、玉璽の押印を許可したと報道されていることは事実である。さらに、ハーグ事件後、〈朝鮮の〉長老政治家達が国王の退位を勧告したことも報道されている。たとえそうであったとしても、我々が持っている証拠は、過去三年間の歴史、及び日本が行った朝鮮の権利と自由の侵害を思えば、決定的である。日本は日露戦争以来、鉄の手に、多分ビロードの手袋をはめて、朝鮮を抑えてきた。だが、ビロードが薄すぎて鉄の手は透けて見えた。表面的には日本は朝鮮の保護国であるが、実際には朝鮮国民を支配している。しかも、日本は朝鮮を、国民的生活と国家的独立へと導く立場にあるのである。もし日本が、伊藤侯爵が描いた計画を本気で実行しさえすれば、弱き隣国にとっては測り知れない恩恵を与えることになっただろう。日本が自らの宣言に忠実であるかどうかは、将来にかかっている。⁽¹⁵⁾

帝国主義という当時の世界情勢を考えると、日露戦争

までに日本が朝鮮に対して取ってきた政策はある程度まで已むを得ない。だが日露戦争以後これまで三年間に取ってきた日本の政策はもはや保護国としての領分を超えている。「日本は朝鮮を、国民的生活と国家的独立へと導く立場にある」とする伊藤が描いた計画を日本は本気で実施すべきであった。ランバスが言っているのは恐らくそういうことである。では、なぜ彼はそれほどまでに伊藤を信頼したのか。

九 ランバスが見た伊藤博文

次に引用する文章は『朝鮮雑記』第五章中、〈クロマー卿 (Lord Cromer) の政策〉と小見出しを付けられたものからである。高宗退位のニュース〈日本では七月二十日発表〉、第二次日韓協約調印のニュース〈同じく、七月二十五日発表〉は読んでいるものの、七月二十九日、伊藤が京城の日本人倶楽部に新聞記者を招いて、高宗退位から第三次日韓協約に至る経緯と爾後の見通しを説明した有名な会見記事〈八月一日発表〉は読んでいない内容になっている所からすると、書かれた時期は七月二十六日から三十一日までの間である。

伊藤侯爵がとるべき政策に関し、東京とソウルにおいて盛んに論議がなされている。侯爵自身は、例によって慎重な沈黙を守っている。これが彼の長所の一つである。しかしながら、物知り顔の連中の間ではすでに結論に達している。つまり、とるべき方式は、アルジェリアにおけるフランス方式ではなく、インドにおける英国方式、さらに良策は、エジプトにおけるクローマー卿方式であると言っているのである。日本は、植民地化と保護政策の両面において、アングロサクソン方式を採用した。日本は、一方において、国民の台湾、満州への移住を奨励し、他方、朝鮮半島の保護政策を実施した。当初は、日本人が保護政策の下にすべての官職を占めるであろうと広く報道されていたが、伊藤侯爵が重要な行政上の地位に朝鮮人を登用することを決定したので、日本人は真に困難な仕事を果たさねばならぬ地位にのみ任命されるようになるであろうと言われている。もしこれが事実ならば、伊藤統監の先見の明を示す例を更に一つ付け加えることになる。⁽¹⁶⁾

ランバスはこのように伊藤に韓国におけるクローマー卿を期待したが、ランバスのこの期待は一週間も経たずして

破られることになる。既に述べたように、七月二十九日に、京城駐在の日本人新聞記者を招いて行った談話において、伊藤は、新しい協約は「日本人ニ韓国政府内適当ノ地位ヲ得シメ当国ノ政治ヲ本邦人ニ於テ自ラ行フニ至ラシメタルモノ」なることを明らかにしたからである。⁽¹⁷⁾

不思議なことは、第三次日韓協約における伊藤の意図がこのようにして明確になったにもかかわらず、伊藤に対するランバスの敬意が微動だもしなかったように思われることである。

七月二十九日の記者会見に続き、七月三十一日には伊藤自らの起草になると言われる朝鮮の軍隊に対して解散を令する詔勅が発令され、翌八月一日には現場に解散命令が通達される。軍隊内には抗議の自殺や、兵士たちの蜂起が続発し、やがて激しい義兵闘争へと発展して行く。

この会見ののち、伊藤は八月十一日、一時、韓国を留守にして帰朝する。軍隊解散令により朝鮮全土が騒然としていた上に、八月二十七日には新帝純宗の即位式が予定されていた。にもかかわらず、伊藤はその間、韓国を留守にして日本にとどまり、彼の留守中、統監代理をしていた長谷川好道朝鮮軍司令官が特派大使として純宗の即位式に出席している。新帝一世一代の即位式に、こともあろうに韓

国統監が出席しないというのはきわめて異常な事態である。背後に何があったのか、大きな謎である。

ランバスはこの伊藤の帰朝に大きな関心を抱いていたようで、『日本雑記』と『朝鮮雑記』の双方に一項を割いている。まず、『朝鮮雑記』第五章〈時の人〉から引用する。

一方伊藤侯爵は、時の人である。下関における彼の歓迎会は、日露戦争の大山元帥や東郷元帥のために開催されたものと同じ位に心のこもった、盛大なものであった。そして大磯に到着した時、彼は、ほとんどすべての名士達が、上は長老政治家にはじまり、ずらりと勢揃いして彼を出迎えているのを見た。東京においては、彼の到着にあわせて、統監道という新しい通りの開通式が行われた。⁽¹⁸⁾

八月十一日にソウルを発つたとすれば、下関到着は十三日頃であろうか。そして滄浪閣のある大磯に到着したのは、十四日頃。一方、ランバスは、八月十三日、横浜のアメリカ総領事館で催された駐日アメリカ大使ルーク・ライト離任にともなう歓送会に出席しているから、⁽¹⁹⁾ちょうどその頃のことである。

続いて、八月二十日、伊藤が首都東京に到着した時の模様は『日本雑記』「日本の首都での現在の出来事」なる章中の〈伊藤侯爵の帰還〉という小見出しの下にはほぼ一頁半にわたって述べられている。

昨日の朝たつぷり半時間にわたって、日本の騎兵の一隊が十時半の列車で朝鮮から到着する侯爵を迎えるため、新橋駅に向かう途中私達の家の窓下を通って行った。首都の官界、政界、民間の著名な日本人達で長いプラットフォームはいっぱいになり、一方駅前の広場では、近衛連隊の槍騎兵の一隊と軍楽隊、それに入り口の両側に二丁にもなんなんとする密集した人間の壁のように押しよせた大群集で、活気にあふれた場面が展開された。(九行中略) 皇居に着くと、朝鮮総督(統監、の誤まり)だった侯は天皇に拝謁し、日朝協定(日韓協定、の誤まり)の締結を頂点とする政治の進展について報告した。拝謁の終わるころ、天皇は次のような言葉を侯に賜った。「東洋の平和を重視する私の見解にかんがみて、私はさきに貴官に朝鮮を援助し、その福祉を増進せしめる仕事を委託した。貴官は私の意のあるところをよく体し、たゆまず尽力し、もって著し

い成果をおさめたことは、目下新協定の締結に見られるところである。これをよくなしとげたのは、ひとえに貴官の純なる忠誠心のなすところであつて、私は貴官の功勞を深くよみするものである。」(二行中略)これはこの著名な政治家・外交官の経歴の中で、また一つの章をとじる出来事である。それは日本の見地からいえば、祖国の歴史において既に確立している侯の名聲に、さらに大なる栄光の輝きを加えるものである。それはまた、朝鮮の愛国者の立場から見れば、暗黒と不名誉の中に終わる朝鮮の歴史における一つの章の幕切れでもある。⁽²⁰⁾

この文章が書かれた期日は次のように推定することができる。一九一七年二月、朝鮮総督府が発行した『朝鮮の保護及び併合』という本がある。日本による朝鮮の保護国化から併合に至るまでの過程を総督府の囑託委員がまとめたもので、総督府の内部史料といふべき性質のものである。その第一章「朝鮮ノ保護」第七節「日韓新協約締結ト列強ノ輿論」に次のような一節がある。

我聖上陛下ハ本協定締結ニ関シ伊藤統監ノ功勞ヲ嘉賞

シ給ヒ八月二十日御前ニ於テ親シク左ノ勅語ヲ賜ハリタリ曰ク 朕夙ニ東洋ノ平和ヲ重シ卿ヲシテ韓国ノ扶植ニ任セシム卿克ク朕カ意ヲ體シ：⁽²¹⁾

ここに言う、「朕夙ニ東洋ノ平和ヲ」以下の明治天皇の勅語は、さきに引用したランバスの文中にある天皇の「お言葉」と完全に一致する。ランバスが翌日の(恐らく英字)新聞によりこの記事を読んだことは文脈より明らかである。従つて、〈伊藤侯爵の帰還〉は八月二十一日に書かれたものである。

これによつて、「伊藤侯爵が描いた計画を本気で実行しさえすれば、弱き隣国にとつては測り知れない恩恵を与えられることになっただろう」というランバスの先の言葉は、その期待が完全に裏切られたことが分かったこの段階において、「朝鮮の愛国者の立場から見れば、暗黒と不名誉の中に終わる朝鮮の歴史における一つの章の幕切れでもある」と変つてゐる。暗黒と不名誉に包まれたこれまでの朝鮮の歴史は、事実上、朝鮮を日本の植民地と化した第三次日韓協約により、幕を閉じた。そう言つてゐるように思われる。微妙な言いまわしで、分かりにくい文章であるが、ほぼ同じ時期に書かれたと推測される『朝鮮雜記』五「朝鮮情勢」

中の次の文を読めば、その意味するところは明らかである。

しかしながら、朝鮮人が日本に対する抵抗を夢見ることは無駄である。少なくともここ当分の間は避けがたい運命に服し、平和を実現する方策を追求しなければならぬ。⁽²²⁾

このランバスの見方は、現状を踏まえて「ダメなものあくまでダメ」という冷めたリアリズムである。「あと一歩踏み出せば、朝鮮がキリスト教化される最初の異教国家となるという時に、我々は手を貸さないというのだろうか」という数カ月前の熱気はもはや見られない。

このあとランバスは、九月五日から九日にわたっては広島で開かれた伝道集會に、九月二十一日には神戸における婦人教役者修養會に講師として出席したことが分かっているが、『日本雜記』、『朝鮮雜記』に一九〇七年九月以後に関する記事は、十二年の空白を経て、一九一九年の第三回訪韓以降の記事があるばかりである。「朝鮮人は」少なくともここ当分の間は避けがたい運命に服し、平和を実現する方策を追求しなければならない」というランバスの助言は、同時に、キリスト教徒としての自らに対する戒めの言

葉であったように思われる。

十 おわりに

一九〇七年四月、東京で世界キリスト教学生大会が開催されている頃、韓国では平壤を中心にキリスト教大復興運動が最高潮に達していた。四月六日から十二日まで韓国統監伊藤博文の囑託として情勢視察のために平壤に潜行滞在した内田良平は、平壤市内で聖書を持たずに街を歩く者は肩身が狭いほどであると報告している。⁽²³⁾市内の教会には毎日一万五千人が集まったという報告もある。⁽²⁴⁾ランバスが同年四月、六月に訪問したソウルと松都は内田の見た平壤ほどではなかったとしても韓国における信仰復興運動の熱気は十分に感じとれたはずである。伊藤や後藤新平が肩入れした東京の世界キリスト教学生大会と、内田が観察した平壤の信仰復興運動とは同じキリスト教徒の集まりでも性格はまったく異なる。一方は日本が世界のキリスト教諸国と肩を並べるための集まりであり、他方は祖国の滅亡を目前にした人々が最後の望みをキリスト教に託しての集まりだった。日本と韓国双方にキリスト教徒の友人を持つランバスにとって一九〇七年の半年におよぶ日本滞在は「口

マ書」第十三章のパウロを身をもって経験した半年だったのではないだろうか。

【注】

- (1) ウォルター・R・ランバス著『日本雑記』（半田一吉訳）、関西学院キリスト教教育史資料Ⅲ『ウォルター・ラッセル・ランバス資料』関西学院キリスト教主義教育研究室、一九八〇年、七二頁。
- (2) 同右、七三頁。
- (3) 同右、七三〜七四頁。
- (4) 同右、七七頁。
- (5) 韓国史料叢書第十九『尹致昊書簡集』一九七一年、大韓民国国史編纂委員会刊編、一五八頁。
- (6) 同右、一五八〜一六〇頁。
- (7) ウォルター・R・ランバス著『朝鮮雑記』（宮田満雄訳）、関西学院キリスト教教育史資料Ⅴ『ウォルター・ラッセル・ランバス資料（2）』関西学院キリスト教主義教育研究室、一九八四年、四三〜四四頁。
- (8) 前掲書『日本雑記』、六六頁。
- (9) 同右、七一〜七二頁。
- (10) 梁柱三編『朝鮮南監理教会三十年紀念報』ハンダ版、昭和五年、朝鮮南監理教傳道局刊、二六頁。

- (11) 常石希望「韓国における初期キリスト教受容の要因」愛知大学語学教育研究室編、『言語と文化』第十三号、二〇〇五年、六五頁。

- (12) 『尹致昊書簡集』、一六六〜一六七頁。
- (13) 同右、一六七頁。
- (14) 前掲書『朝鮮雑記』、二一八頁。
- (15) 同右、三七〜三八頁。
- (16) 同右、三二〜三三頁。最後の傍線を付した部分は宮田氏の訳を筆者が改めたものである。宮田氏の訳は次のようになっている。

伊藤侯爵は、重要な行政上の地位に朝鮮人を登用することを決めたと言われている。そうすれば、真に困難な仕事を果たさねばならぬ地位にのみ、日本人が任命されるであろう。もし、これが事実ならば、インド駐在英国総督代理の先見の明を示すもう一つの例となる。

これに対応するランバスの原文は左のとおりである。

(but) the Marquis has determined that the prominent administrative posts shall be occupied by Koreans, so it is said, and the Japanese will be appointed to those positions only where real work has to be done. If this

is true it is but another illustration of the Resident-General's long-headedness.

宮田氏はこの“the Resident-General”を「インド駐在英國総督代理」と訳された上で、「クローマー卿のことを指す」と注を付けている。しかし、「クローマー卿」、すなわちフランシス・エヴェリン・クローマーは一八八三年から一九〇七年までイギリス代表兼総領事としてエジプトに君臨し、事実上、エジプトを支配した人物で、インドに駐在したという事実はない。彼は四半世紀近くに及ぶエジプト駐在中、灌漑・鉄道等のインフラ整備と、税制・法制・教育等の改革を成功させエジプトの安定化をもたらしたことで、当時の欧米人に比較的好評を博した人物である。ここでは、そのクローマーのよくな役割を朝鮮において伊藤が果たしてくれていることをラッパスは期待しているわけであるから、“the Resident-General”が「伊藤統監」を指していることは明らかである。

- (17) 『朝鮮の保護及び併合』朝鮮総督府編、大正二年二月、一一九頁。韓国・亜細亜文化社『旧韓末日帝侵略史料叢書—政治編⑥』一九八四年、復刻版所収。

- (18) 前掲書『朝鮮雜記』、三三二～三四頁。

- (19) 前掲書『日本雜記』、八〇頁。

- (20) 同右、八五～八六頁。

- (21) 前掲書『朝鮮の保護及び併合』、一一八頁。

- (22) 前掲書『朝鮮雜記』、三一頁。傍線部分に対する宮田氏の訳は、「空しいことであつた。少なくとも、彼等は現在の」となっているが、改めた。

- (23) 内田良平「平壤地方情勢視察報告書提出の件」、韓国国史編纂委員会編『駐韓日本公使館記録26』、三七九頁。

- (24) 内田と同じ時期に平壤を訪問したアメリカの心理学者ラッド博士 (George Trumble Ladd) の報告。当時の平壤の人口は四、五万人だったというから、実に平壤市内の三人に一人が信仰復興運動に参加したことになる。前掲書『朝鮮の保護及び併合』、七一頁。